

鶴見大学仏教文化研究所・公開講演会 仏教とキリスト教

著者	三枝 充憲
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	7
ページ	1-15
発行年	2002-04
URL	http://doi.org/10.24791/00000500



仏教とキリスト教

三枝 充恵

こんにちは、三枝です。これから「仏教とキリスト教」という題でお話しを申し上げます。

「仏教とキリスト教」という題ですから非常に範囲の広い題で、とりとめのないお話しになるかと思いますが、基本的な事柄のお話しを申し上げて本日の責任を果たしたいと思えます。

日本ではキリスト教という言い方をしますが、キリスト教という言い方は正しくありません。本当はクリストで、キではなくクなのです。クリスト教と言うべきなのですけれども、なぜか日本ではキリスト教と言っておりますから、ここでもキリスト教という名前でお話しを進めてまいります。

今、高崎学長からご紹介がありましたように、僕の父は昔の海軍の軍医をしておりまして、途中で軍医をやめ、静岡の町の真ん中で外科の医院を始めました。そこで生まれましたから、宗教ないし仏教とは特別な関係のない出身です。静岡で生まれて静岡でずっと育ちました。

少し自己紹介をさせていただきますと、静岡の町の中の小学校に通っていて、やがて静岡県立の静岡中学校に入

りました。その間、小学5年生くらいから中学2年生くらいまで4〜5年間は、メソジスト教会という、キリスト教の教会ではかなり有力な教会で日曜学校が開かれており、毎日曜、その日曜学校へ通いました。ですから子どもの中には、どちらかというところクリスチャンです。聖書を読んで、賛美歌を歌って、例えばクリスマスや復活祭には色々な劇をしたり色々な催し物に参加していました。子どもの時は、洗礼は受けませんが、クリスマスや復活祭にはして成長しました。静岡の中学を終えてから東京に来て、旧制の第一高等学校に入りました。一高は全寮制度で生徒はみな寮で生活しましたが、日曜には時々青山教会や本郷教会へ行つて、牧師さんの説教を聞きました。どういう事を聞いたかは今は覚えていませんけれども、キリスト教のことについての知識、知識といつてもやがてはそれが知識に変わっていくモトになるような、そういう雰囲気を感じました。

高等学校の終わりの頃にいわゆる学徒出陣というのがありまして、軍隊に取られました。軍隊では訓練を受けた仲間が大勢外地に行き、外地に赴任する途中、船が沈められて遭難した者が多くおりました。僕は幸い内地勤務で終始しましたから、外地へは行かないで済みましたし、敗戦と同時に故郷に帰ることが出来ました。

そして静岡の自宅が全部戦災にあつておりましたので、郊外の曹洞宗のお寺にしばらく疎開しておりました。その曹洞宗のお寺の住職は、丹羽廉芳という方で、この方はのちに永平寺の禅師さんになられました。しばらく前に米寿でお亡くなりになりました。その方が黙つて僕をその禅寺に置いておいて下さいました。翌年僕は東大の文学部哲学科に入り、高崎君と一緒に哲学科を卒業し、大学院を経て助手になり、助手の終わり頃にドイツへ留学しました。ドイツでは皆さんご存知のミュンヘンにおりました。ミュンヘンは非常にカトリックの盛んな所ですから、カトリックの人々と付き合いが多くありました。先ほどお話ししたように、プロテスタントではありませんがキリスト教とはだいぶ馴染んでおりましたので、よくクリスマスなどには教会に行つてお説教を聞いたりしました。そん

なことがありまして、高崎君からここでお話しするようになると言われた時に「仏教とキリスト教」という題を選んだわけです。

皆さんはキリスト教というと、どういうことを思いつくかということに関心がありますが、ちょうど大学の宗教学の講義で幾らかはお話しを聞いておられると思いますので、あるいはそれと重複するようなことも幾つかこれからお話しする中で出てくるかと思いますが、「キリスト教とは何か」というお話しをいろいろしてゆきたいと思えます。初めにキリスト教のお話しをして、後で仏教のお話しを申し上げたいと思えます。

例えば、この場所は鶴見大学会館ですが、鶴見大学という大学がいわば曹洞宗という仏教のひとつの派と言いますか、宗の設立であるところから、鶴見大学では仏教関係の講義がかなり充実していると思えます。しかし日本の場合、国立大学には仏教学もないしインド哲学もほとんど、いわゆる昔の帝国大学を除いてはありません。ヨーロッパの大学をみますと、ヨーロッパは大陸とイギリスとはつきり分かれておりますが、大陸の方、ことにドイツの場合は大学は全部国立でありまして、私立の大学というのはありません。そして今でこそ数が非常に増えましたけれども、大学が色々の問題をかかえていて、昭和53(1978)年、いわゆる大学紛争が世界中で起こりました。それ以来ドイツでも大学を増やしまして、学生の要望に耳を傾ける、それから制度も色々大勢の学生を迎えるような制度になりました。例えば大学院でマスター(ドイツではマギスターと言います)の資格を与えるというコースもドイツの大学に出来てまいりました。僕がいた頃にはドクターしかなかったのですが、大学紛争以後はマスターコースも出来ました。僕がドイツに行ったのは昭和34(1959)～37(1962)年にかけてなので、まだドイツ(当時は西ドイツ)には国立大学が全部で12、3しかなかったのです。しかしドイツの大学はどんな大学にも必ず神学部があります。テオロギー、キリスト教の神様のことを扱う神学部というのがあります。テオロギッシュ・フアクリテ

イト、ファカリティ・オブ・セオロジーといいますが、大学の要項を見ますと、第一番目が神学部です。そういうふうに神学部がありますから、そこでキリスト教についての色々な研究がなされております。

今日のお話の内容は、キリスト教というよりは、キリスト教に基づいて、平易にお話ししたいと思っています。ちょうど仏教の研究が、我々東大のインド哲学で学んだ時には、仏教としての研究よりも仏教としての研究というふうに、仏教と仏教があるのと同じように、キリスト教とキリスト教というのものもあるわけで、そういうものについてお話ししたいと思います。おそらくキリスト教の歴史を話しても興味がそれほどわかないと思いますし、僕自身もそういうものについては詳しくありませんので、むしろキリスト教がキリスト教として成立する時点、キリスト教を成立させた、創始したのはイエスですから、イエスについてのお話しをし、仏教は、僕は初期仏教と称しますが、とくにゴータマ・ブッダのことを研究しておりますので、いずれも仏教とキリスト教の創始、始まった時代のお話しを詳しく申し上げたいと思います。

イエスのことは、しばしばナザレのイエスといいますが。ナザレというのは地名です。今のエルサレムの、イスラエル領の少し北の方にガリラヤという地域がありました。そこにナザレという町がありまして、その出身ということで、ナザレのイエスと呼ばれます。イエスという名前の人は何人もいるわけですが、やがてキリスト教を始めるイエスは、ナザレのイエスと呼ばれています。イエスの誕生に合わせて西暦が作られたといいますが、これは今の西暦は少しミスがあります。正確にはイエスが生まれたのは紀元前6年または7年と言われています。ご承知のようにイエスは最後は十字架につけられて殺されますが、イエスの死んだ日付はだいたい見当がつきまして、紀元30年4月7日という日付がだいたいわかっております。言い換えますと、紀元30年4月5日の夜最後の晩餐がありまして、翌日急に慌しくなります。その日にイエスはエルサレムのユダヤ教徒に捕らえられ裁判にかけられて、

翌4月7日午後3時に十字架上で死ぬという生涯ですから、イエスの生涯はだいたい30数年ということになります。しかしイエスがどういう少年時代を送ったとか、どういう形だったかということについてはほとんどわかりません。

イエスという言い方はギリシャ語ですが、イエスはギリシャ人ではありませんし、ローマ人でもありません。もともとユダヤ人ですから、ユダヤの言葉をしゃべっていました。ユダヤの言葉はヘブライ語です。しかしヘブライ語でも少し訛ったヘブライ語で、アラム語と言われていますが、それを聞いて話しました。イエスの使った言葉はアラム語でした。イエスが歩いた地域はみんなユダヤ人の地域ですから、イエスの使った言葉はこのアラム語ないし広い意味でヘブライ語ですけれど、そのヘブライ語あるいはアラム語でテクストが作られるということはありま
せんでした。イエスの生涯についてはあまり詳しくはわかっておりませんが、イエスというのはギリシャ語です
から、ヘブライ語になおすと、ヨシユアということになります。ヨシユアという名前の人についての学問であるヨシ
ユオロギー、ロギーというのは学問という意味ですが、ヨシユオロギーという学問を先ほど申しました大学の神学
の先生が調べるということをしますけれども、これについては資料が全然ありません。ですからイエスがどうい
う生涯を送ったかということについて、子どもの時の状態などはほとんどわかりません。そしてイエスはバプテスマ
のヨハネから洗礼を受けまして、洗礼を受けたあと荒野をさまよう、そして突然説教を始めます。説教をした期間
はだいたい1〜2年といわれています。その説教が今、新約聖書に残っています。

ご承知のように新約聖書というのは全部で27のテクストが集められた編集で、初めに4つの福音書があります。マタイとマルコとルカ、初めにあるこの3つは同じ見方で作られている福音書なので、共観福音書と言います。その後もうひとつヨハネの福音書があります。マタイ、マルコ、ルカの福音書に説かれているようなイエスの生活は、1年ないし2年くらいしか続きません。そしてエルサレムの神殿に出掛けていって、そこで捕まえられて、十字架

につけられるということですから、イエスの生涯は死ぬ直前の1、2年しかわかっておりません。イエスが死んでからあとキリスト教が成立するわけですが、キリスト教が成立して活動を続けることに憤りを感じてそれを撲滅しようとする動きが出てきます。そのうちの一人にパウロという人がいまして、パウロがキリスト教をやっつけようというので、エルサレムへ向かってくる、その途中で急に回心、コンヴァージョンと言いますが、方向転換しまして、非常に熱心なキリスト教徒になり、しかも伝道を開始します。新約聖書にはパウロの伝道の色々な記録があり、パウロが東の方から西の方、ローマへ向けて色々な伝道師を派遣するだけでなく、自分も伝道に行きます。そして帰って来てから、その伝道先に書簡を送るといふ、パウロの書簡、コリント書とかローマ書とかそういうふうな書簡がありました、最後にヨハネの黙示録というのがついていて、全部で27のテキストを集めた編集が新約聖書です。

新約聖書の「約」は契約、約束の「約」です。聖書には旧約と新約がありますが、イエスが出てくる以前はユダヤ教があつて、そこでは旧約聖書が使われていました。これはモーセの始めたユダヤ教というものの内容が旧約聖書に非常に詳しく説かれているわけです。旧約というのは昔の約束、古い約束という意味です。新約というのは新しい約束という意味です。神とユダヤ人とが契約して旧約を作った、そしてユダヤ教が創立され展開してきて、その中から或る意味で全く毛色の変つたナザレのイエスが神との新しい約束をしたというので、新約というわけです。しかし旧約のテキストがユダヤ人の使っていたヘブライ語で書かれているということは当然ですけれども、新約のテキストはギリシャ語で書かれています。イエスが話しをしたのは言うまでもなくヘブライ語、正確にはアラム語という言葉ですが、アラム語で書かれています。アラム語はあります。すべてギリシャ語で書かれました。というのは、当時のエルサレム近辺では住んでいるのはユダヤ人であり、それを統治していたのはローマ人です。ローマの軍隊がイエスの活躍した範囲全体を占領して、イエスを十字架につける命令を下したのもローマの軍

人です。そういうふうにはローマが支配してユダヤ人が住んでいた中で、公けのものはギリシャ語で書かれたものですから、マタイ、マルコ、ルカをはじめとする新約聖書はギリシャ語で書かれました。

イエスの言った言葉が僅かにアラム語で残っているのは、皆さん聖書を開いたことはほとんどないかもしれませんが、片仮名で書かれていますから、ごく僅かですが、目に留まると思います。いちばん有名な言葉としては「エリ エリ レマ サバクタニ」という言葉で、福音書の最後のところに出てまいります。これは、イエスが十字架につけられて息を引き取る直前に叫んだというイエスの最後の言葉として、アラム語のまま新約聖書に載っています。この意味も聖書には書いてありません。「我が神 我が神 どうして私をお見捨てになったのか」という意味です。ですからイエスは最後亡くなる時に神が自分を見捨てたと叫んで死んだというふうには新約聖書には書いてありません。そういう説明まで新約聖書にはきちんとしておられます。ですから僕が子どもの時にメソジストの教会へ行つて、イエスというところとすぐイエス・キリストといつて、イエスはそのままキリストであるというふうには説明して日曜学校などすませましたけれど、正確に言うとなザレのイエスという人物とキリストとは直結できないところがあります。

キリストの説明をしましょう。キリスト、正確にはクリストですが、キリストという言葉はギリシャ語です。これをヘブライ語で言いますと、メシアといえます。日本でもメシアという言葉は聞いたことがおありかと思えますが、救世主というような意味です。世の中を救う主ということです。元来はメシアというのは「油を注がれた人」というので、「油を注ぐ」というのは王様が王位につく時にする儀式で、「油を注がれた者」というのは王様を表します。同時に救世主、世を救う神、世を救う主をいいます。それがヘブライ語ですから、イエスはメシアという言葉を当時一般に使われていた言葉として知っていたということが言えます。先ほど自己紹介でお話ししましたよう

に僕が高等学校の時に教会に行つて説教を聞くと、イエスが十字架の最後に自分を見放した、見捨てた神に対して恨み言を言っているような、こういう言葉をどういふ風に理解するかということ、色々な牧師さんの話を聞きましたけれども、僕自身納得いきませんでした。事実、新約聖書にはそう書いてあるわけですから、それをそのままここでお話しておきます。

なお、新約聖書について見ますと、例えばイエスとキリストという言葉結びつけるために色々な考えが浮かぶわけですが、実は聖書の中にこういう文章があります。これはマルコ8―27、マタイ16―13、ルカ9―18という所ですが、イエスは北のほうからだんだん南の方へおりてきます。その途中でピリポ・カイザリヤという町に行きました。この町に着いて何人かの弟子がイエスについていました。そこでイエスが弟子たちに向かって「人々は私を何と称しているのか」と質問します。弟子が答えて言うには「あなたはバプテスマのヨハネと言われている」とか、あるいは「エリア(尊敬されていた預言者)と言われている」「預言者の一人だと呼ばれています」と弟子たちが答えます。そこでイエスが更に弟子たちに向かって「それではお前は私を何と思っているのか。誰と言っているのか」と直接質問します。そうするとイエスの一番忠実な弟子はペテロですが、ペテロは「あなたはキリストです」という返事をします。「あなたこそがキリストである」(マタイ伝には「あなたこそ神の子キリストである」と答えています。そういうふうに向かつて「あなたはキリストです」とか「あなたこそキリストです」というふうに答えが返つて来た時に、イエスは「そういうことを他で言つてはいけない」と言つて戒めます。

ですから、イエスはいわば自分がキリストであるということ、弟子がイエスをキリストだと、あなたはキリストですよというふうに認めたと、あるいは答えたという文章はありますけれど、イエス自身はその答えに対して、そういうことを言つてはいけないというふうに戒めています。言い換えますと、イエスは

自分がキリストだと称しているわけではありません。ですからキリスト教を始めたのはイエス・キリストだというふうに言いますけれども、イエスとキリストとの間にはそのまま直結するようなものはありません。少なくともイエス自身にはないのです。そういう点が後でお話する仏教と非常に違います。

仏教の場合は、ゴータマ・ブッダが自分はブッダであるということ宣言しました。ですからゴータマ・ブッダという人格があつて、そういう人格によって仏教は始められています。キリスト教の場合はイエスはあちこちから教えを説いていますけれども、自分がキリストであるということをも人々が説くのを認めませんでした。イエス・キリストというひとつの人格ということは、イエスが生きている限りはまだ成立していません。キリスト教の場合、強調されるべき事柄なのです。

僕が子供のころ、日曜学校に行っている時は、いつでもイエス・キリストというひとつの姓名のように、まるでイエス・キリストというひとりの人がいたかの如く、そしてその人がキリスト教を始めたかの如くいわれましたけれども、それはこれからお話しするイエスが死んで後の事柄です。イエスが生きている限りは、まだイエスはキリストと直結しているわけではありません。イエスの弟子たちが、ことにペテロを中心とした何人かの弟子たちが、自分を導いて下さるイエスがキリストであるというふうに感じていたわけですが、公認されていたわけではありません。イエス自身がそういうことを言うな、言つてはいけないというふうにたしなめているのです。その点と同じ世界宗教としての仏教、キリスト教という場合に、その始まりがかなり違うということを申し上げたいと思います。もう一度申し上げますと、イエスは自分がキリストであることを誰にも言つてはいけないと弟子たちを戒めたという文章が、マタイの16章などにはつきりと説かれています。ピリポ・カイザリヤという場所において、そういうことが説かれています。

さて、そうしてやがてイエスはエルサレムに入って、ユダヤ教の教会でちょうど過ぎ越しの祭りというお祭りが行われていたのですが、そのお祭りに出掛けて行って、そこでユダヤ人に捕らえられ、そして裁判にかけられて十字架につくということになります。イエスが十字架の上で息が絶えて、その遺骸をお墓に運びます。運んでいって、遺骸を墓の中に置いて、翌日が安息日だったので一日おいて三日目にまたその遺骸を見に行くと、遺体がなくなっていたという出来事がありました。なくなっていたところで一応、例えばマルコによる福音書は終わっているわけですが、更にそれに追加が加わりまして、なくなったというの実はイエスは復活したのだという、それがテクストの終わりについています。そしてイエスの復活という出来事、これが何よりもキリスト教の中心の思想になります。イエスというのは実は神が人々を憐れんで、神の子として、この世に遣わしたのだとされ、それでイエスは人々の罪を引き受けて十字架について死んだとされます。死んだ後は、罪を引き受けたわけですから、そこで許されて復活しました。この復活という思想が、キリスト教の中心思想になります。

というのは、復活したと人々が考え信じてからちょうど50日目の五旬節(ペンテコスタ)に、人々が集まってきました。集まってきた人々はかつてイエスの教えを聞いたことのある人々ですが、みなイエスが復活したということ信じられています。そういうイエスの復活を信じた人々が集まって、そしてその集まった中から、ペテロがそこで演説をします。その演説の内容が新約聖書の4つの福音書の後に「使徒行伝」という章があり、そこに書かれています。あのように死んだイエスは実はキリストであったということを、ペテロが言うのと、みなそうだそうだというので、この時点でイエスはキリストになりました。イエスが死んで復活して50日経ってから、イエスはキリストになったわけです。ですから、イエスによってキリスト教は始まったと言いますが、何度も申し上げますように、イエスが生きているうちに確かに今の新約聖書に説かれている色々な説法はなされましたけれども、まだキリスト教と

いう名前で説かれていたわけではありません。ナザレのイエスの教えとして説かれていました。それが、十字架、復活ということを経て、死んで50日目の五旬節の日に、イエスはキリストである、メシアである、救い主であるということが説かれて、そしてキリスト教というものが始まることになるのです。こういう点が、これからお話する仏教と非常に対照的なポイントということが出来ます。

今、イエスの生涯をごく簡単にお話ししまして、イエスが復活したということをお話ししましたが、イエスはこうして十字架に付けられて死んで復活しやがて昇天しましたから、この現世には、この世の中には何も残していません。イエスの死骸があるわけではありません。イエスは復活してしまいますから、いわば歴史的な何かの遺物がイエスにまつわって存在するということはありません。ですから、キリスト教について言いますと、歴史的な事実というものについては捉えようがありません。そうではなくて、イエスが復活したというのは歴史的事実というよりは、信仰による事実ですから、信仰による事実としてキリスト教があるということです。歴史的事実としてあるわけではありません。キリスト教は一般に仏教、イスラム教などと並んで世界宗教といって、イエス・キリストが始めたと言いますが、イエス・キリストが始めたという言い方は今詳しくお話したように正確ではなくて、イエスが復活したという信仰をもって、この信仰をひとつの事実としてキリスト教というものが出発します。たとえばキリストという言葉をごく簡単に百科事典などで説明したものをみますと、「神が選んだ救い主の称号である。イエスこそキリストである」という信仰である。」というふうに書いてありまして、今お話したような色々な出来事が含まれています。

なお、キリスト教の内容は何かといいますと、よく、愛ということを行います。愛というのはギリシャ語でアガペーといいますが、アガペーというのはマタイとかルカにこういうふう書いてあります。「心を尽くし、精神を

尽くし、思いを尽くしてあなたの神を愛せよ」それが第一。「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」というのが第二で、この二つから愛ということがキリスト教の本質というふうな言い方がよくされます。そういう説明で僕は子どもの時からキリスト教というものを学んでまいりましたけれども、その後、先ほどのお話しから何度も申し上げました、ヨーロッパの神学者、キリスト教のほうでいろいろ研究された結果、この愛という言葉は必ずしもイエスだけが説いたのではない、旧約にも出てくるし、当時ギリシャからローマにかけての哲学でストア哲学とというのがあったのですが、そういう中でも説かれています。だから愛という言葉がキリスト教の生命ということになります。それがイエスの教えの基本だというふうなことにいったとしても、イエスだけの特別なオリジナルな言葉ではありません。そういうふうなこともあってキリスト教についての出発点のお話しをかなり詳しくいたしました。

以下、仏教のお話しを申し上げることにします。先ほども申しましたように、イエスとキリストが直結できないこと、むしろイエスが死んでからイエスをキリストであると信じたということからキリスト教が始まったということと言いましたが、仏教の場合は、ゴータマが悟ったブッダになったということを、ブッダ自身も十分わかっておりますし、しかもブッダはそれを人に説明しています。ブッダは悟りを開いて、その悟りを楽しんでいたわけですが、そのうち人々にも自分の悟った教えを説こうと決心しまして、そして悟った場所から立ち上がって人々に説こうと歩き出すところがあります。これは2、3のテクストに説かれています。ことに有名なのは『マハーヴァツガ』という、バリー文律蔵の「小品」というところに書かれてあるのがよく引用されます。最初に誰に説こうかと考え、昔一緒に苦行をした5人に説こうというので、ゴータマがブッダになって初めて、5人のいるサールナートへ向かって歩き始めます。と、そこにウパカという人が現れて、ウパカがゴータマに向かって「あなたは誰ですか」と質問します。そうするとブッダは答えて言います。「私は一切に打ち勝ったものである」、「一切を知るも

のである」、「何ものにも汚されていない」、「全てを捨てて妄執がなくなつて解脱している」と。そういうふうには、「私は一切智者である」、「私はブツダである」ということをウパカという人に説明しています。だから先ほどイエスが「キリストと言ってはいければならない」というふうには弟子に言ったのは違って、ブツダは自分で自分がブツダであるということを認めて、そしてそれを人に説いています。「今私は私の教えを説こうとしてベナレスに向かつて歩き始めたところだ」と説明するわけです。そういう点で仏教はまさしくゴータマがブツダになり、ブツダになつたということを経験して、それによつて仏教は始まります。そういう点が、仏教の始まりとキリスト教の始まりと非常に対照的と言いますか、違うということを経験して、今日はとくに強調しました。

皆さんお聞きになつたことがあると思いますが、ブツダというのは「悟つた人」という意味で、これは普通名詞です。固有名詞ではありません。ゴータマ・シツダッタ、ガウタマ・シツダールタという人が悟つたからゴータマ・ブツダというわけです。ゴータマ・ブツダの弟子にサーリプッタ(舍利弗)という人がいますが、サーリプッタもブツダになりましたから、サーリプッタ・ブツダという人もいるわけです。悟つた人はみなブツダです。ですからいわゆるお釈迦さん、ゴータマ・ブツダ以外にもブツダはいました。ただ、ゴータマという人が始めたので、仏教はゴータマ・ブツダによつて始まつたということは言いますけれども、実はブツダというのは複数いるので、必ずしもゴータマに限らないブツダもあり得るといふことです。現に、今申しましたようにサーリプッタをブツダとして扱っているテクストもあります。

しかも仏教はご承知のようにブツダが死んでから約五百年経つと、大乘仏教というのが出てきます。大乘仏教が出てくるといふことは、新しいブツダが出現したといふことです。般若経とか法華経とか華嚴経とか浄土教とかいろいろの経典が説かれますが、こういう経典を説いているのは全部ブツダです。ですからそれは五百年前に死んだ

ゴータマ・ブッダではないブッダが説いているわけで、ブッダは益々増えてきます。現に例えば阿弥陀仏というブッダがいます。これはゴータマ・ブッダとは違うブッダが出てきています。それからブッダのことを如来とも申しますから如来のついた称号を持つ、最も有名なのは大日如来というような、そういう如来も出てきます。当然、ブッダというのは複数になります。しかもゴータマ・ブッダ以外の固有名詞をもったブッダも出てきます。

さらにブッダというのはやがて、大乘仏教が起る以前から出てくる菩薩という術語ないし思想を含んできて、ブッダになる前が菩薩であり、菩薩としてその人が生涯を送るとやがてブッダになると、ブッダになる前が菩薩だというふうな考えが出てきて、その菩薩が非常に広く受け取られます。やがてはだれもが菩薩であるという考えが大乗仏教の中に出て来ます。そうすると菩薩であるということはやがてブッダになるということですから、これはブッダになる素質が元々誰にも備わっていることになりました。ブッダというのは一般の人々、衆生といいますが、衆生がブッダになるといふふうに考えられます。ついに日本では、死んだ人をみな仏といいます。仏というのはブッダという言葉の日本語訳ですが、だれもみな仏様になります。我々はよく仏壇に仏様をおまつりしてありますが、そこにおまつりしてある仏様、ブッダというのは、ゴータマ・ブッダでもないし、名のあるブッダでもなくて、実は自分の死んだ父、母、兄弟、そういう人々を仏とみなして拜んでいます。このようにブッダというのは、誰もがブッダになるといふふうに考えられました。

そういう点でいわゆるキリスト教が、非常にキリストという言葉を使ひ、制限して使ひ、イエスが生きているうちは使わず、イエスが死んでからイエスにだけキリストという言葉をつけるようになり、イエス以外にはキリストというのはあり得ないとしており、そういう使ひ方とは仏教のブッダは全く違ふという、そういうことをとくに仏教について強調されるのであらうと思ひます。全ての人がブッダになる、そういうことを仏教は説くとい

うことになっていきます。人が死んでからキリストになるなどとキリスト教が説くことはありませんから、そういう点が仏教とキリスト教との基本的な違いといえることができます。

今日は、「仏教とキリスト教」という題を掲げましたが、お話しした内容はキリスト教を主にしておそらく皆さんがあまりキリスト教には馴染んでおられないと思いますので、あるいは新約聖書を自宅に持っている方がおられるかもしれないけれども、それを開いて読んだことはほとんどない方々を前にして、キリスト教についてかなり詳しくお話しして、そして仏教については大雑把なお話しだけで臨みました。これでお話しを終えることにいたします。

長い時間ありがとうございました。